

スウェーデンの新しい悩み

福祉国家スウェーデンでも聞き飽きるほどの社会問題が幾らでも出てくるのですが、今回の悩みはスウェーデン人にとって奇襲的なことです。それはヨーロッパ放浪民族と云われるロマ人の急増です。

ロマ人は9世紀ごろ北インドで迫害されヨーロッパや中東に向かって放浪を始めた、俗にジプシと呼ばれている人たちです。今でも彼らは、どこに行っても偏見と差別の貧しい生活を虐げられているのです。



(DN新聞写真)

ロマ人はヨーロッパのどの国にもいて、その数は1000万人以上と云われ、ルーマニア、ブルガリ、ハンガリーなどの東欧諸国に多く住み、その90%近くが貧困生活を余儀なくされている。

西欧ではフランスに40万人、イタリアに20万人以上いると云われ、これらの国を旅した人なら物乞いをする人や子どもたちに出会った経験が必ずある筈です。

この人たちが、気候の厳しい北欧諸国にどっと押し寄せてきたのです。それは2007年、東欧諸国が欧州連合EUに加盟して、人びとの往来が自由になったためなのです。

ロマ人家族がスウェーデンで最初に記録されたのは1500年代で、それからかなりのロマ人が来たようで、彼らの多くは軽蔑的な「タッタレ」と呼ばれ、日雇い農夫として生活を営んでいたそうです。今では約3万人のロマ人系いるそうですが、社会に同化している。

私が1960年代にスウェーデンにきた時には、雨傘の様に大きく開いた黒のスカートのロマ人女性を街のあちこちでよく見かけたものです。その多くはフィンランドからのロマ人で、当時、フィンランドには1万人以上のロマ人が住んでいたようです。しかし、この10～20年の間に彼らの姿はほとんど見られない。両国の教育や就労支援が功を奏したらしい。

ロマ人がストックホルムの市街の路上に座り物乞いをする姿を見るようになったのは3～4年ほど前からである。

スウェーデン人にとって、最初は物珍しく、「わざわざ！ こんな遠いところまで... ..」とか「こんな寒いところに座って... ..」とかの同情心を見せ、差し出す紙コップに小銭を落して行く人がかなりいたのです。

これが幸か不幸か、今では、全国で彼らを見ることができ、その数は 5000~6000 人とも云われており、ストックホルムなどは、どのスパーストアーの入口には場所を競うようにして物乞いをしています。外気が夏の 30 度以上あろうと真冬の-10 以下あろうと無関係なのです。このままでは、スウェーデンの新しい風物になりそうなのである。



そうして、スウェーデンの人たちが、この増え続ける物乞いを新しい社会問題として捉え始めたのです。あちこちから、「どうにかしろ！」の声が高まり、この問題をどう対策すべきかの意見が大きく分かれ始めたのです。以下は、幾つかのテレビ討論会で交わされたディベートの代表的主張の抜粋です。

* 「もう、彼らはあちこちに座り込んで、通行人の邪魔になる！衛生上も良くない！ このままでは 他国の様に何らかの制限か禁止をすべきだ！」

♥ 「あなたは、なんて非人間的な人でしょう！ あの人たちは好きで物乞いをやっていると思いますか？ この寒い冬の中で.....、彼らには、あれしか生きる道が無いんです！ その道を閉じて、生きる自由を奪うのですか！」

* 「では、彼らの仲間がどんどん増えて、彼らが病気や怪我をしたとき、誰がその費用を払うんですか？ あんたが払いますか？ 私にはそこまでの余裕はありませんよ！ ルーマニアはEUから、貧困や教育改善のための莫大な支援をもらっているんじゃないですか！ 帰って、それを要求すべきです！」

♥ 「ルーマニア政府は、他の国に行きたがる人を止める訳にはいかない、といい加減ないい訳をして、差別解決の努力をしていないのです。それだけ差別が根強いのです。この点で、EU加盟国はルーマニアに圧力をかけるべきです。しかし、状況が改善されるまでには時間が掛かるのです。それまで、私たちが出かけることはすべきです。そう云う意味で、スウェーデンが物乞いを許していることを誇りとすべきです！（注：フィンランドも制限なし）」

* 「彼らは、なぜ、ただ路上に座っているのですか？ 若い人なんか仕事ができそうじ

やないですか？ 車も運転できる人もいるそうですし... ..

♥ 「彼らのほとんどは教育を受けてなく、読み書きもできない人たちばかりで、仕事にありつけないのです。それに、彼らは何もしないと云いますが、貴方はこの寒さの中で何時間も路上に座っていることが辛くないとお思いますか？ 1日分の労賃をやるからと云われて、貴方はやりますか？」



* 「広場や公園でテントやトレーで生活している現場を見たことがありますか？ あれでは、衛生がひどいもんです！ それに、公園は住民たちの憩いの場所です。やはり、制限してもらわないと安心できません！ 子どもたちが自由に遊ぶことができなくなるかも知れませんよ？」

♥ 「彼らはいろんなところで立ち退きされています。有料のキャンプ場では満員や閉めだしもあります。解決策は国や自治体が彼らの住居を何とかすることです。中東難民と同じ扱いにして住居を用意すべきです。」

♥ 子どもの遊び場は、この国にはたくさんあります。それに、彼らの事情を良く知っている子がたくさんいます！ この前、3人の小学生が“今週のお小遣いです”と云っていくらかのお金を路上のコップに入れたのを見ました。その子たちの顔のほほ笑みの温かさ、なんと素晴らしかったこと！



(DN新聞写真)

人びとの討論は今でもこのように並行線で続いています。

最近のルーマニアのテレビで“スウェーデン人は親切です”とインタビューに答えていたロマ人のニュースが放映されたそうですから、これからもロマ人は増え続けることが予想されます。しかし、彼ら同士の物乞い場所の競争も激化しており、今では地下鉄や電車の中まで侵入してきます。

増える傾向にあるロマ人に対して、それを強制的に禁止させようとする動きは今のところ見られない。確かなことは、スウェーデン人も増える物乞いをする人に徐々に疲れを感じており、その多くが、物乞いが街からいつか自然消滅して行くことを願っているようです。

スウェーデンは最も難民を受け入れている国で、シリア難民だけでも現在、7万人もいて、それを受け入れる自治体からの悲鳴も聞かれます。それに加えて、ロマ人の増加、スウェーデンの寛容性がどこまで持つか、この先が懸念されるのです。

たにさわ ひでお in Stockholm